ルドルフ・シュタイナー

「エーテル」について

〔目次〕

■エーテル」について①

「エーテル」観の概略

○講義録より（意訳）
・GA 93a-5/28「秘教の基礎」
・GA 313-2「医学講義」
・GA 239-2「カルマ的諸関連の秘教的考察第5巻」
・GA 236-14「祭りとその意味：昇天とペンテコステ」

■「エーテル」について②

「エーテル」観の比較
シュタイナー／ヴァクスムート／マルティ

神秘学遊戯団

■ルドルフ・シュタイナー
「エーテル」について①
「エーテル」観の概略

・GA 93a-5/28「秘教の基礎」
・GA 313-2「医学講義」
・GA 239-2「カルマ的諸関連の秘教的考察第5巻」
・GA 236-14「祭りとその意味：昇天とペンテコステ」

ルドルフ・シュタイナーにおける「エーテル」は、
19世紀の物理学が想定した「物理的エーテル」とは根本的に異なり，
超感覚的な領域として捉えられた主にエーテル体（生命体・形成力体）と、
それからなる四大エーテルとして詳細に論じられている。

これは人間の超感覚的構成要素の一つであり、
植物・動物・人間の生命現象を司る「形成力」の本質として、
物理体を単なる物質の集まりではなく、
生き生きとした形態に保つ力として働いている。

そのエーテル及びエーテル体について、
シュタイナーの主な講義内容を概観する。

1. エーテル体（生命体）について

人間は以下の四つの構成要素から成っている。

肉体（物質体：鉱物界と共通）
エーテル体（生命体：植物界と共通）
アストラル体（魂体・感情体：動物界と共通）
自我（人間のみ）

エーテル体は物理体に浸透し物理体が崩壊するのを防ぐ力で、
植物は物理体＋エーテル体だけを持ち、
動物はさらにアストラル体、人間は自我が加わる。

エーテル体は「宇宙のエーテル」の特別に分化した部分で、
人間では頭部（特に脳脊髄液の水様部分）に「刻印」され、
全体を組織化している。

シュタイナーは「エーテル体は物理体（肉体）の創造者であり、
自身はアストラル体によって創造される」と述べているように、
物理体はエーテル体の「凝縮した現れ」である。

人間のエーテル体は、成長・治癒・形態形成を司り、
幼児期の歯の交換（約7歳頃）に肉体から独立し、
死後数日で宇宙に解散することになる。

2. 四つのエーテル

エーテルは「熱エーテル」「光エーテル」「化学エーテル」
「生命エーテル」の四種類に分化している。
これらは物理的な「物質」ではなく、超感覚的な「力」であり、
物質体とは方向性・作用において対極的である。

これらは地球進化の段階（土星紀 → 太陽紀 → 月紀 → 地球紀）と対応し、
元素の凝縮に対し希薄化のプロセスを担っている。

・熱エーテル：
最も「粗い」エーテルであり、空気を膨張させる力そのもの。
外的な熱ではなく、内的な「衝動」を生む。
シュタイナーは「熱エーテルは空気を広げる細かいエーテル的物質であり、
第一級のエーテル」と説明している。
人間では情熱（Kama）を愛に変える基盤となる。

・光エーテル：
輝く体から発する力であり、単なる物理的光ではなく、智慧を宿す。
「光の中で神が現れる」（例：モーセの燃える柴）のはこのエーテルによる。

・化学エーテル（音エーテル）：
物理的な化学合成の「反対極」（分析的・形成力）であり、
水の波や音の振動のように、離れたものを結びつける。
シュタイナーは「酸素と水素を結合させる力」と述べている。

・生命エーテル：
最も精妙で「プラーナ」とも呼ばれ、
生命そのものを構成し、
過剰になると組織を「溶かす」（柔らかくする）作用がある。

3. エーテルと四大元素との関係

古代の四大元素（地・水・空気・火）とエーテルは対極にあり、
元素は「外から」体験され、エーテルは「内から」体験される。

火　　⇔　熱エーテル
空気　⇔　光エーテル
水　　⇔　化学エーテル
地　　⇔　生命エーテル

のように対応し、七層の物理-エーテル世界を形成する。

四つのエーテル体は宇宙進化に関して、順次取り入れられ、
これによって人間の形態が進化してきた。

4. エーテル力は反空間（負の空間）を生みだす

シュタイナーはGA 236、GA 239において、
「エーテルは物理力とは逆で、周辺から吸引的に働く」としているが、
「反空間」についての視点のように、
エーテル力を、宇宙の周辺力あるいは周辺から働く力として位置づけ、
物質（物理的中心力・空間充満の圧力）とは
正反対の極（対極）にあるものとして説明している。
これらの力は本質的に空間を空洞化・吸引する力であり、
負の空間（反空間・Gegenraum）を生み出すあるいは体現する。

5. 四大エーテルの人体内の位置づけと極性（健康の基盤）

人体は神経感覚系＝頭部、リズム系＝胸部、代謝・四肢系＝腹部と
四大エーテルが密接に連動している。
エーテル体は「宇宙のエーテル」の分化部分であり、
人体では特に頭部の水様組織（脳脊髄液など）に「刻印」され、
全身を組織化する。

なお、流入の方向が上方（宇宙・頭部）から下方へ入る
熱エーテルと光エーテルは、
頭部に強く透過し、思考・形態維持を司り、
気候・光などの外部影響を受けやすい。

流入の方向が下方（地球・代謝系）から上方へ入る
化学エーテルと生命エーテルは、
代謝・四肢系から上がり、地球から来る（求心力的に活性化）。

健康時は、人間の生体組織はこれらを適切に分離しつつ協力させ、
頭部は上部エーテルをよく通し、下部を「斥ける」ように、
代謝系は下部を吸い上げ、上部と「渦巻き状に衝突・変容」させるが、
このバランスが崩れると病気が生じる。

また、熱・光エーテルが過剰に入ると「硬化・凍結」（病的な頭化）し、
化学・生命エーテルが過剰に上がると「溶解・柔軟化」する。
医療ではこれを基に療法が提唱されている。
（例：硫黄・燐でアストラル過剰を抑え、砒素でエーテル過剰を抑える）

6. カルマ形成

エーテル体は生涯の経験を「彫刻」（形成・刻み込む）し、
死後それを宇宙エーテルに還元し織り込まれることで、
次の生のカルマ形成に寄与することになる。

○講義録より（意訳）

・GA 93a 第5講「秘教の基礎」
（1905年9月30日、ベルリン）

「日常生活では、身体の三つの状態を区別します。すなわち、固体、液体、気体（空気）です。固体は鉱物と区別しなければなりません。空気も水も、やはり鉱物です。神智学の文献では、これらに加えて、さらに四つのより微細な物質の状態が挙げられています。空気よりも微細な最初の元素は、空気を膨張させ、空間的内容を常に増大させるものです。このように空気を膨張させるものは熱です。それは本当に微細なエーテル物質であり、エーテルの第一段階、すなわち熱エーテルです。次に二番目のエーテルの種類、光エーテルが続きます。輝く物体は、神智学において光エーテルと呼ばれる物質の形態を放出します。三番目のエーテルの種類は、最も微細な物質に形を与えるすべてのものの担い手であり、形成エーテル、あるいは化学エーテルとも呼ばれます。このエーテルが、酸素と水素の結合をもたらします。そして、すべてのエーテルの中で最も微細なものは、生命を構成するものです。それがプラーナ、すなわち生命エーテルです。
科学はこれら四種類のエーテルをすべて一緒くたに扱っています。しかし、徐々にこのように区別するようになるでしょう。」

・GA 93a　第28講「秘教の基礎」
（1905年10月31日、ベルリン）

「今、再び「光あれ」と神が言われた状態に注意を向けましょう。地球は凝縮を始めました。光がそれに照り注ぎました。これは人間も凝縮を始めたときでもあります。しかし、以前の力は保持されなければなりませんでした。今、私たちは人間が光を自分を通り抜けさせた状態に到達しました。そこで完全な逆転が起こりました。人間は光を外にあるものとして知覚し始めました。
元来、人間を通じてこの世界に導入されたものは次の通りです。

1. 原子的あるいは生命エーテル
2. 化学エーテル
3. 光エーテル

逆転：

1. 生命エーテルの知覚
2. 化学エーテルの知覚
3. 光エーテルの知覚

今、人間は世界から光を受け戻します。（螺旋の逆転です。）以前は光の源でしたが、今は光が彼の中に流れ込みます。彼は自己閉鎖的な存在になりました。それによって意識を得たのです。光が彼の中に照り注ぎ、人間は周囲の世界を自分の中に映し出させるようになりました。次の段階は、物体をその化学的構成に関して認識することを学ぶことです。彼は物質に対して同情や反感を発達させ、外界との関係を得ました。そして最終的に、原子的あるいは生命エーテルの内的な知覚も得ました。
光が世界に導入されたことによって、人間は固体の形を得ました。化学エーテルの導入によって、世界との関係を得ました。原子的エーテルの導入によって、生命を得たのです。したがって、目を通じて形を、味覚を通じて世界との関係を、嗅覚、鼻を通じて生命を得ました。エホバは彼の鼻孔に生命の息を吹き込みました。」

・GA 313 第二講「医学講義」
（1921年4月12日、ドルナハ）
※『シュタイナー医学講義』水声社 2024/9より引用

「エーテルを全体として考察すると、人間のエーテル体はその一部分であり、特別な分離体です。エーテル一般を考察するなら、皆さんが一般的な霊学の文献からすでに知っているように、エーテル体は未分化なものではなく、四種類のエーテルからなっていることが分かります。それは熱エーテル、光エーテル、化学エーテル、そして生命エーテルです。光エーテルとは、目が見える者の立場から作られた言葉です。目が見える者にとっては、光と関係するものが、このエーテルの最も優位な作用です。しかし、光エーテルの中には他の作用もあります。しかし私たちの大半は目が見える人間なので、他の作用については無視しているのです。」

「第三のエーテルは化学エーテルです。化学エーテルは、主としてエーテルスペクトルのいわば化学的な部分で作用します。化学エーテルについて語る時には、科学的な合成において作用する何らかの諸力ではなく、それらに対して内的に、かつ対極的に対抗している諸力について考えねばなりません。エーテル諸力は常に、身体物質の中で作用している諸力に対抗しています。つまり、ある化学的な合成が行われると、エーテル諸力は分解する方向に作用します。」

「そして次に、生命エーテルは全ての有機的な存在において実際に生命を与える要素であり、特別な種類のエーテルとみなすことができます。

生命エーテル
化学エーテル
ーーーーーー
光エーテル
熱エーテル

さて、これらのエーテルは宇宙に普遍的に実在するのですが、それ自体を直接物質的に観察することはもちろんできません。」

「重要なのは、何か超越的なものが物質的感覚的なものの中に刻印を作り上げると、そこに刻印として現れたものは、その該当する超感覚的なものを透過するようになるということです。つまり、普遍的なエーテルは、人間の頭部の水性部分に刻印を作り上げます。私たちが脳の水性の内容とみなすべきものを、分化していない水とみなしてはなりません。そうではなくて、それは、固体部分が機構化されているのと同じように、内的に完全に機構化されているのです。」

「この水性部分はエーテル本性の刻印です。常に刻印はこのように透過性のあるものになります。眼は、真にゲーテ的な意味で本質的に考察すると、光の創造物であり、それゆえに眼は光を透過するのです。眼が光から生じたというのは単に一つのイメージではなく、深い叡智によって機構化されたので、光を透過するのです。しかし人間の頭部全体としては、その液体機構を通してエーテル的なものを透過します。なぜなら頭部はエーテルから作り出された刻印だからです。」

「これは霊学的にもきちんと観察することのできる事柄です。しかしその場合には、ひとつ集成しなければならない点があります。それは、人間の頭部のこの部分亜、熱エーテルと光エーテルだけに透過性があるということです。つまり、外から人間の頭部に作用できるのは、熱エーテルと光エーテルだけなのです。」

「熱エーテルと光エーテルの作用は、あらゆる側から射し込んで来ます。そして化学エーテルと生命エーテルの作用は、四肢代謝系を通って上方に向かって、熱エーテルと光エーテルに対抗して放射します。人間の頭部は生命エーテルと化学エーテルをできるだけほんの少ししか受け入れないように、細心の注意を払って機構

化されていますが、その代わり、四肢代謝有機体は、まさに地球の自然の諸力から生命エーテルと化学エーテルを吸収します。この二種類のエーテルは人間の中で出会います。一方では、生命エーテルと化学エーテルが下から上へと流れ、他方では、熱エーテルと光エーテルが上から下へと流れます。この二種類のエーテルによって、人間の機構は秩序正しく区分され、それによってひとつの高みに到達します。人間はそのように機構化されているのです・。

上から射し込んで来るもの、つまり光エーテルと熱エーテルは、上から流れ込む以外の経路で下部機構に有機的に受け入れられることはないということが、人間有機体にとって必要です。そして同様に、何か別のものが下から上に向かって流れ込むべきではありません。つまり、外側からは光エーテルと熱エーテル、下からは生命エーテルと化学エーテルが流れ込まなければなりません。そしてこの両者は、人間自らが正常な機構の中に留まろうとするときに保持されなければならない機構によって、人間の中での協同作用へと導かれます。」

・GA 239 第二講「カルマ的諸関連の秘教的考察第5巻」
（1924年3月30日、プラハ）

「人間が死を通るとき、最初に肉体から解放されます。彼は自我組織、アストラル体、エーテル体で生きています。しかし、数日後、エーテル体はアストラル体と自我から離れます。今彼が経験するのは、自分から出ていくようなものです。最初は大きくないが次第に拡大しますが、それがエーテル体です。このエーテル体は宇宙空間へ、星の世界へ拡大するように見えます。しかし、拡大するにつれてエーテル体は非常に微細なものになり、数日後には消えてしまいます。しかし、これに関連して別のことが起こります。エーテル体が宇宙に与えられ、拡大し、微細なものになる間、私たちは星の秘密に手を伸ばし、星の秘密に浸透しているように感じるのです。

死後、月の領域を通るとき、月の存在は私たちのアストラル体から地球存在で経験したことを読み取ります。地球存在から離れた後、私たちは月の存在に受け入れられ、今生きているアストラル体は彼らにとって本のように読まれます。そして、彼らは読んだものを誤りなく記録し、再び地球に降りるときに新しいアストラル体に刻み込みます。

私たちは月の領域から水星の領域、金星の領域を通り、太陽の領域に入ります。太陽の領域では、以前の生で経験し、達成したすべてが内側に生き生きとした現実となります。私たちは高次のヒエラルキーの存在と交わり、彼らの行為に参加し、今まさに宇宙の中にいます。地球存在では地球上を動き、地球の条件に閉じ込められているように、今は宇宙の広がりの中に生きています。地球では閉じ込められていたものが、今は無限に広がっています。私たちは宇宙の秘密を経験しますが、それは物理的な自然の法則に支配されているようには感じません。これらの自然法則は、当時、人間の心の取るに足らない産物に思えます。私たちは星で起こっていることを、神的な霊存在の行為として経験し、これらの行為と結びつきます。私たちはできる限り、これらの存在と共に働き、行為します。そして、宇宙そのものから次の地球での存在の準備をします。」

・GA 236 第十四講「祭りとその意味：昇天とペンテコステ」
（1924年6月4日、ドルナッハ）

「エーテルそのものは私たちの物理的感覚では不可知覚です。小さなエーテルの断片を見るとき、物理的感覚では何も見えず、ただそれを通り抜けて見るだけです。エーテルはあなたにとって空虚な無に似ています。しかし、エーテルの環境を全体として見るとき、あなたは青い空を見ます。私たちは青い空は本当には存在せず、空虚な空間を眺めているだけだと言います。青い空が見える理由は、あなたが実際にエーテルの端を知覚しているからです。こうして、あなたはエーテルを天空の青として見ます。青い空の知覚は、本当にエーテルの知覚です。（･･･）青い空を知覚するとき、私たちは私たちを取り巻く普遍的なエーテルを知覚しているのです。

最初に触れるとき、私たちはエーテルを通り抜けて見ます。それは私たちにそうすることを許します。それでも、エーテルは青い天空において自分を知覚可能にします。したがって、人間の知覚にとって青い空の存在は、エーテルそのものが、宇宙に壮大に立っているその威厳によって、不可知覚でありながらも知覚可能なレベルに昇る、という表現で表すことができます。物理学は空の青について唯物論的に理論を立てます。物理学

にとって、この点で賢明な結論に到達するのは非常に難しいことです。なぜなら、青い空が見えるところには物理的なものが何もないことを認めざるを得ないからです。それでも、人々は光線が特別な仕方で反射・屈折してこの青を生み出すという、最も精巧な理論を紡ぎ出します。実際、ここで超感覚的世界がすでに支配を始めています。宇宙では超感覚的なものが確かに私たちに可視になります。私たちは、それがどこでどのように可視になるかを発見するだけです。エーテルは青い空を通じて私たちに知覚可能になります。」

「カルマがどのように働くかを考えるとき、私たちは常に、人間の本質的な存在、最も内的な存在である自我が、世界で生き、表現するための三つの道具を持っていることを念頭に置かなければなりません。これらは肉体、エーテル体、アストラル体です。人間は本当に肉体、エーテル体、アストラル体を携えて世界を歩いていますが、彼自身はこれらの体のいずれにも存在していません。本当の意味で彼は自我です。そして、カルマを苦しみ、創造するのはこの自我です。」

「人間のエーテル体に関して言えば、宇宙には普遍的なエーテルが広がっています。人間のエーテル体は明確な人間の形を持ち、内部に明確な運動の形態などを持っています。これらは確かに宇宙のエーテルとは異なります。しかし、宇宙のエーテルは、人間のエーテル体に見られるものと根本的に同じ性質です。同様に、人間のアストラル体に見られるものと、広大な宇宙全体を通って働くあるアストラル原理との類似性を語ることができます。」

「私たち自身のアストラル体には、さまざまな形で喜びや快適さの感情があります。同様に、宇宙のアストラル体を通じて、星空の多様な配置があります。古い科学が本能的に霊視的で、人間の第三の構成要素を「アストラル」あるいは「星の」体と呼んだのは不思議ではありません。なぜなら、それは星に現れるものと同じ性質だからです。

　宇宙の環境に自我が現れないのはなぜでしょうか。その理由は、人間の自我がここ地球上で、実際には三重――肉体、エーテル、アストラル――の世界に現れることを考えるとわかります。宇宙に現れる人間の自我は、常に以前の地球生活の繰り返しであり、再び死と新生の間の生活に自分を見いだします。しかし、死と新生の間の生活で自我を観察すると、地球の環境にあるエーテルは人間の自我にとって意義を持たないことがわかります。エーテル体は死後すぐに離れます。星を通じて私たちに向かって輝くアストラル世界だけが、死と新生の間の生活で自我に意義を持ちます。そして、星を通じて輝くその世界に、高次のヒエラルキーの存在が生きており、人間は死と新生の間にカルマを形成します。」

■ルドルフ・シュタイナー
「エーテル」について②
「エーテル」観の比較
シュタイナー／ヴァクスムート／マルティ

シュタイナーのエーテル観については
mediopos4142（2026.3.15）で概観したが、
その視点を展開したのは
まずヴァクスムートであり、
それを批判的に展開させたのがマルティである。

ギュンター・ヴァクスムート
（Günther Wachsmuth、1893-1963）は
シュタイナーの最も近い協力者の一人で、
法学者・経済学者として教育を受けながら、
人智学運動の組織化、著作、科学的研究に深く貢献。
個人秘書、協会の会計、書記を担当したほか、
自然科学セクションを長年主導。
死去まで協会の財政・組織基盤を支え、
シュタイナーの死後、協会の維持と発展に大きな役割を果たした。

またエルンスト・マルティ（Ernst Marti, 1903-1985）は
人智学において、特にエーテル領域の研究と
人智学的な医学の深化で知られるスイス生まれの医師で、
自然科学を精神科学的に拡張する先駆的な仕事を行い、
イータ・ヴェグマンらとともに
現代の人智学的医学の基礎を築いた人物の一人。

マルティはヴァクスムートのエーテル観を批判し、
発展させたことで知られているが、
ここでは主にその批判的な視点についてみていく。

なお、人智学における最初のまとまったエーテル論
ヴァクスムートの『宇宙・地球・人間におけるエーテル的形成力』
（Die ätherischen Bildekräfte in Kosmos, Erde und Mensch/1924）は
いまだ邦訳されていないが、

マルティの『四つのエーテル』と
マルティの死後に編集された『エーテルと生命力』には邦訳がある。
（『四つのエーテル』は、耕文舎＋イザラ書房　2018、
『エーテルと生命力』は、涼風書林　2015）

今回その二者の視点を比較するにあたり、
ヴァクスムートの著書も参照してみた。
（それについては、後日とりあげることにしたい）

両者の視点を詳細に比較検討することは、現状では困難だが、
ここでは主要な視点についてまとめるとともに、
理解するための視点の補助線を提案しておきたい。

なお、マルティは『四つのエーテル』で
ヴァックスムートのエーテルについての視点に対し
辛辣な批判を行っている。
そのどこか過剰とも思える批判の仕方については疑問があるが、
詳しく見ていくとその批判内容そのものには頷けるものがある。

（あの辛辣なまでの批判的な表現には
主流派ともいえるヴァクスムートに対する
協会から追放されたヴェークマンに近い側のルサンチマンも
あるのではないかとも思えるが、それはあくまでも個人的な感想）

ヴァクスムートの「エーテル」観は、
シュタイナーの四つのエーテル
（熱エーテル・光エーテル・化学エーテル・生命エーテル）
を継承しながら、これらを
熱エーテル（意志）→光エーテル（感情）
→化学エーテル（思考）→生命エーテル（統合）という階層として、
単なる「力」ではなく、相互に浸透し
リズミカルに交替・変容する動的な力としてとらえることで、
生命現象を組織化する形成原理として働くものとしている。

こうしたエーテルが宇宙全体に遍在し、
植物の成長・人間の生理・地球の気象など
直接的にあらゆる生命過程を形作っているというのである。

さらに、惑星系におけるエーテル的形成力の
波動的・リズミカルな作用として、
三段階の波動理論によって、
惑星的リズム（土星・太陽などの影響）が
地球上の気象・生物・人間の生命過程に
波動的に作用するメカニズムを説明。
宇宙的・地球的・人間的なスケールを横断的に結びつけている。

三段階の波動というのは、
土星領域から太陽領域へ向かう宇宙的展開としての第一の波、
太陽と地球の間での展開としての第二の波、
反転原理が現れ、宇宙的影響が
地上の生命に具体的に及ぶ第三の波である。

そうしたヴァクスムートの「エーテル」観に対し、
マルティは、エーテルと形成力を区別する必要性を強調している。

ちなみに、シュタイナーはエーテル体を
「生命体」や「形成力」としても語っているが、
厳密に「エーテル＝形成力」とは同一視しないまま、
文脈に応じて柔軟に語っている。

エーテルは「生命の力」として働きながら、

「宇宙から地上へ降りる力」としても語られ、
エーテルだけではなく他の構成要素
（四大元素・アストラル・自我）と協働していて、
その形成力はより高次のアストラル体（感情・魂）や
霊的階層（ヒエラルヒー、星・惑星・黄道）からの影響を受け、
具体的な形態を生むものとして働いているとし、
それを現象ごとに説明しているのだが体系化はしていない。

マルティは、ヴァクスムートがエーテル体（形成力）を
生命現象の中心・自足的な原理とし、
アストラルや霊的影響を相対的に薄く扱う傾向があるとして、
それらを区別してとらえる必要性があるという。

マルティは、エーテルは
周辺的で統一的な生きた「質料・媒質」であり、
四大元素の極性とは対極にあり、
単独では無機的・一般的な生命力を発揮するが、
具体的な形態は作らないとし、

それに対し形成力（Bildekräfte）は、
高次の霊的・原型的な力
（アストラル体やヒエラルキー、星・惑星・黄道からの影響）が
エーテルに働きかけ、元素とともに
特定の形態・種特有の形を生むというのである。

ヴァクスムートは基本的に
「エーテル＝形成力」としているが、
それを「未批判的に受け入れられた誤り」とし、
シュタイナーのエーテルへの視点を現象学的に整理・体系化。

四大元素
エーテル（極性基盤）
形成力（上からの霊的刺激）
という三層の構造を強調し、
医学・農業・芸術への応用をより詳細に論じている。

以上のエーテル解釈の相違をまとめれば、
主要なポイントは、
エーテルと形成力を同一視するか区別するかであり、

ヴァクスムートがエーテル自体が形成力であるとしたのに対し、
マルティはエーテルは媒質であり、
形成力は上位の霊的原理であるとしている。

しかしシュタイナーの視点はどうかといえば、
脈次第で両義的であって、体系化を避けているともいえる。

こうしたエーテル観の相違は現在も議論されているようで、
ヴァクスムートの影響が長く続いたものの、

現在では元素・エーテル・形成力の相互作用というように
区別を意識した統合的アプローチが求められているようである。

以上が概観だが、
マルティがなぜそこまで
エーテルと形成力を区別しようとしたのか、
理解しがたいところもあるので、
その点について、試論（私論）ながら
二つほど補助線を引いて理解への補足としておきたい。

ひとつには、
マルティの視点を勝手に名づけるとすると
「階層的な一元論」とでもいえるもので、
霊的ヒエラルキーにおいて一元的に働く力という視点である。

エーテルはあくまでも
一般的な生命現象を生み出すが、
それはすべての生物で同じように働く普遍的な力であって、
中心指向（元素）に対し周辺指向で
宇宙全体を包むような性質をもっているのに対し、

エーテル的形成諸力は、
そのエーテルに対して、星々・惑星・太陽など
周辺の特定位置から来る力であり、
形成力なしでは個別的・種特異的な形態を生み出せない
としている。

この区別は、元素が「物質（Substanz）」になるために
星の力が加わるのと完全に並行していて、
元素だけでは「金や水晶、骨の物質」は生まれず、
星の力が元素を「個別化」するのと同じく、
エーテルだけでは「具体的な形態」は生まれず、
形成力がエーテルを「形態化」するのだという。

ヴァクスムートのように
「エーテル＝形成力」という
階層のない平板な一元論としてしまうと、
エーテルが「すでに形成力である」と見なされ、
エーテルが自ら形態を生み出す「独立した実体」とされ、
上位の霊的・星的影響（アストラル界・霊界）の役割が
とらえられなくなってしまう。

一見するとエーテルと形成力を区別すれば
二元論的になってしまうように見えるのだが、
むしろヴァクスムートのような一元論においては、
結果的にエーテルが自ら形態を生み出す「独立した実体」とされ、
高次の働きが否定されてしまう。

マルティの区別は、エーテルを「抽象的な実体」から解放し、

より豊かな四元的・階層的宇宙観のもとで、
純粋に「働きの場」として位置づけるためのもので、
区別することで真の動的理解が可能となる。

マルティの視点が二元論的かといえばそうではなく、
伝統的な一神教的のような
「神が世界を創造する」という静的・二元的な図式とは反対に、
平板な一元化ではなく階層的な仕方で一元化することで、
一つの働きの連鎖を、より精密に階層的に理解することできる。
階層的な区別を加えることで、初めて
連鎖が本当の意味で「動的」かつ「豊か」になるといえる。

この点に関するシュタイナーの示唆（もとになっている視点）は
おそらくGA110『霊界のヒエラルキーと物質界におけるその反映』で
下位と上位の霊的ヒエラルキーが物質界に反映しているという視点。
特に重要なのが第二ヒエラルキーを中心とした
惑星的・星座的な高次の霊的存在からの働きかけである。

すべては「一つの霊的実在」の活動で、
物質質界もエーテル界もアストラル界も、別々の「もの」ではなく、
霊的活動の異なる現れ方・次元であって、
下位のエーテル的働きと上位の形成諸力は、連続した連鎖の中にあり、
上位が下位を「貫いて」「導いて」いる。
区別は「分離」ではなく、一つの活動の内部での
方向性・起源・密度の違いであるという。

つまり、階層の下位と上位をふまえることで
むしろ階層的な働きが一元論を生きたものとするということで
マルティはその生きた一元論のために
エーテルと形成力を区別したというわけである。

たとえると、ある意味でこれは、スピノザが
階層的で動的な関係のない一つの実体の永遠の必然性として
一つの実体が平面的に展開するとした汎神論的な一元論から、
静的な統一から動的な統一（階層を通じた進化）へと深化した
動的な実態論ともいえるシュタイナーの視点との違いとして
理解することもできる。

さて、もうひとつの補助線は、
マルティの視点は、「場（場所）」、
つまり「述語」的な視点だということである。

マルティの区別を、「場（媒質・質料）としてのエーテル」と
「主語的・能動的な働きとしての形成力」という観点でとらえると、
形成力はエーテルという述語的な場から
主語的なものとしてあらわれる働きだということである。

つまり、エーテルは「背景・可能性の場」
「述語的・受容的・一般的な媒質」として働き、

そこに上位の霊的なもの
（アストラル体、星的・惑星的影響など）が加わることで、
形成力という「能動的・個別化する主語的な働き」が生まれる。

たとえば、植物の場合、
エーテルが提供する「場」を基盤に、
形成力が「太陽と地球の極性」を具体的に組織化して
葉・茎・花の形態を形作る。
形成力が「主語的に」働きかけることで、
葉の螺旋配置や花弁の特定形状」が生まれるともいえる。

その視点を展開したともいえるボッケミュール（1928-2020）は、
四大エーテル（熱・光・化学・生命）を観察可能な現象として捉え、
植物の形態形成を詳細に記述しているが、
そこでは、エーテルと形成力の論争において、
現象学的アプローチが重視され、
マルティの区別に近い立場を取りながら、
特に葉の変容過程が、静的な構造ではなく
動的・変容的なプロセスとして現象学的に描かれている。
エーテル単独では形態を完全に説明できず、
上位の力（アストラル体、星的・霊的影響）が
関与するとしているのである。

マルティはそうした植物形態学に関する示唆のほか、
医師として、形成力を人体の健康・病理・治療に適用したり、
形成力の体への直接的な顕現として、
人間のエーテル体を活性化を示唆するなど、
人智学的な農業・治療教育・芸術療法の実践のための
基本的な体系を与えたといえる。

マルティのそうしたエーテル観は重要だといえるが、
シュタイナーがあえてそれを体系的な図式としては
語っていなかったということは
念頭においておく必要があるのではないかと私的には考えている。

マルティのエーテル観は
実践可能にするための体系的な図式を
与えてくれることはたしかで、
その背景には霊的ヒエラルキーにおける働きという
シュタイナーの明確な視点があるのだが、
体系的な図式化をおこなうことで、
失われてしまう要素がないとはいえない。
実践のための理論化が、
理論の外を見えなくさせてしまうこともあるからである。

マルティのエーテル論を読んでいると、
内容的にはそれなりに頷けるのだが、
その体系的な図式的な表現にどこか違和感を感じたりもする。

ある観点を緻密な体系として図式的に構築すればするほど、
概念が明確化されるぶんだけ、
そこからメタファー的な豊かさ、
言葉をかえていえば詩的なものが抜け落ちていく、
ということでもある。
ポイエーシスとしての高次の自然学でありながら、
そこにポエジーはあまり感じられない。

群盲象をなでる、という逸話があるが、
多かれ少なかれ認識は部分的であることを避けられない。
にもかかわらず、厳密であろうとすればするほどに、
みずからの群盲としての部分は見えなくなりがちである。

シュタイナーが明確な定義や図式、
体系化を避ける傾向があるのも、
その点から考えれば頷けるところがある。

その意味では、今回とりあげたシュタイナー、
ヴァクスムート、マルティのエーテル観を
多視点的な見方で並行して見ておくのがよさそうである。
そうでなければ、どこか宗派争いのようなことになりかねない。

あくまでもそのときどきの論点に応じ、
適切な視点を心掛けるというのがよさそうだ。